

名号本尊の教義哲學的解釈

木 村 世 雄

浄土真宗の本尊は阿弥陀如来一仏である。しかしその形態には絵像・木像・名号の三形態がある。今日、常識的に用いられているのは形像本尊と総称される絵像・木像の阿弥陀如来である。しかし、親鸞・覚如・存覚における真宗本尊の見解は専ら名号本尊に重点を置いている。

名号本尊は親鸞によつて独創されたものであるとされるが、その背景として親鸞の活動していた場所が寺院などでなく道場形式の草庵が多かったことから、便宜性を重視して、簡素な名号本尊を用いられたと見ることも不可能ではないが、ここでは教義的必然性の見地から考察を進める。

一、親鸞の阿弥陀仏觀

親鸞在世以前の浄土教における阿弥陀仏は主として来迎仏として理解されてきた。就中、源信の『往生要素』の影響が大きい。しかし親鸞の思想では臨終来迎の思想を現生正定聚の立場から否定されているので阿弥陀仏に來迎思想を結びつ

けることはできない。また「化身土文類」で『觀經』の仏身を

謹顯化身土者、如「無量寿仏觀經」說、真身觀仏是也（『真宗聖教全書』〈以下「真聖全」〉と略記 二の一四三頁）

と、化身としている。親鸞にとつての真実の仏身は「真仏土文類」に

言真仏「大經」言「無辺光仏・無碍光仏」又言「諸仏中王也、光明中之極尊也。」『論』曰「歸命尽十方無碍光如来」也（『真聖全』二の一四一頁）

とある如く無限の光明であると説示される箇所が他にも見出せる。

阿弥陀仏とその浄土を無限の光明の世界であると捉える背景は、人間のいかなる思惟・概念をも超越した仏が阿弥陀仏であるとの理解を親鸞が持っていたことを表している。光明、即ち光はそれ自体「いろもなし、かたちもましまさ」（『唯信鈔文意』）ない。ゆえに形像で表現できない。形に現れたとし

てもそれは真実の仏体ではない。

親鸞は形像に表れた固定的な仏身に対して凡夫が実体的な執着を示したり、神秘的な偶像化に陥ることを避けるために敢えて名号本尊を用いられたと考えることはできないか。形像本尊を用いられない理由として考えられることは、形像ではそれが立像であろうと坐像であろうと、形になった時点で阿弥陀仏の存在を限定してしまうからではないか。つまり阿弥陀仏はあらゆる概念を超越した「いろもなし、かたちもましまさ」ない法性法身としての特徴がある。この点は絶対におろそかにしてはならない真宗の阿弥陀仏観の一側面である。だが、像となつてしまえば直ちに黄金色を中心とした、大小さまざまな阿弥陀如来があらわれる。相対的で有限な阿弥陀如来になつてしまう。親鸞はそれらを化身・化土とされているものと考察する。覚如の『改邪鈔』には明確に

本尊なおもて『観経』所説の第八の像観よりいでたる丈六八尺、随機現の形像をば、祖師あながち御庶幾御依用にあらず、天親論主の論文すなわち「帰命尽十方無碍光如来」をもて真宗の御本尊とあがめましましき。いはんやその余の人形においてあにあがめましますべしや。末学自己の義すみやかにこれを停止すべき(『真聖全』三の六六頁)

とあることから、親鸞は最優先的に名号本尊を用いていたことが理解できる。

ここでは「言葉」である名号を真実の仏身として理解されているのだが如何なる意味があるのだろうか。名号を仏身として理解することは仏教では極めて異例のことと言える。

二、文字としての本尊

本尊は殆どの場合、絵像あるいは木像である。例外的に日蓮宗依用の「南無妙法蓮華経」と書かれた本尊もある。浄土真宗の名号本尊も例外的な本尊として分類されるであろう。本尊はこの現実世界(応土)において仏の姿を表すものである。形像本尊は人間の姿に模したものである。それは相対的な姿であり大・小の分別が生じることになる。

対して名号は大小を超えていく。存覚の『弁述名体鈔』(光明本尊の解説書。仏光寺の了源の要請によつて著された)には

絵像をかき、木像につくれるは、ちいさくかけばちいさきかたち、おほきにかげばおほきなるすがたなり。ただその分をまもるがゆへに真実にあらず。不可思議光如来ともいひて、文字にあらはせるときはすなはち分量をささざるゆへに、これ浄土の真実の仏体をあらはせるなり(『真聖全』五の二三九頁)

と名号、すなわち言葉に表れた仏身は分量を超えた絶対であり。それが現実世界においても触れることのできる真実であると説示している。親鸞・存覚の教学においても触れることのできる真実であると説示している。親鸞・存覚の教学に

においては有量的（相對的）な考え方で阿弥陀仏を表現できないことを明確に示している。有量（數量）の次元で表現されるならば、それは化身・化土と見るのが親鸞の基本的立場である。

三、方便法身としての名号

仏身論を語る上で基本的な思想である二種法身説の中、方便法身を親鸞はいかに理解したのか。『一念多念文意』には方便法身とまふすは、かたちをあらはし、御なをしめして、衆生にしらしめたまふをまふすなり、すなわち阿弥陀仏なり。この如来は光明なり、光明は智慧なり、智慧はひかりのかたちなり、智慧またかたちなければ、不可思議光仏とまふすなり……世観菩薩は尽十方無碍光如来となづけたてまつりたまへり。（『真聖全』二の六一六頁）

とある。この文において方便法身の「かたち」を巡り複雑な論旨が展開されている。親鸞の言うかたちとは実体的なかたちではなく、抽象的・概念的な方便法身のかたちを巧みに表現していることと見ることが出来る。一旦、「かたち」を出しておきながら「かたち」を否定して、再度「かたち」を持ち出してくるのだがそれは最早、実体的なかたちではなくことばとしての「かたち」である。このことは有相から無相へ、

そして真空妙有の相としての名号は仏身であり得ることを見なすことができるだろう。文に依れば「智慧またかたちなければ」と順接（原因・理由）の接続助詞を用いることによって名号としての仏身の根拠としていると解釈できるのではないか。

名号を仏身とした場合、さきに挙げた『弁述名体鈔』にあるが如く「分量をささざるゆへに、これ真実の仏体をあらはすことが可能なのである。光明や智慧には実体的なかたちがないからこそ（空なればこそ）、名号となつて真実のかたちを取り得るとされるのである。

世親が「尽十方無碍光如来」と示したことは親鸞にとつては画期的なことであり、実際に十字尊号を中心に名号本尊を製作している。その幾つかの裏書には「方便法身尊号」と書かれてある。時代が下り形像本尊が流布し始めるとその裏書には「方便法身尊形」とあるのが目立つようになるが、親鸞の用例には「方便法身尊形」と書かれたことは一例もないことから、方便法身は特に名号を指示していると伺うことができる。

（キーワード）名号本尊、弁述名体鈔、方便法身

（龍谷大学大学院）